

蟹 / ミトコ

ツヨム / 蛇

1-1

ミトコちゃんとツヨムくん、現われる。

ミトコ：(周りを見渡して)よちゃ！(反応はないが嬉しそうに)よちゃ！えへ、これは私の毎朝の日課なのですが、飼っているペットに、というか友達に、朝の挨拶を繰り出します。よちゃ！そうすると向こうも、(真似して) 重そうなハサミをゆっくりあげて(低い声) よちゃ！と返してくれます。わざわざ大きい方の重いほうのハサミを持ち上げるので、私のためにそんなに無理しなくていいよただの挨拶だよと思うけれどそんな純粋さに見惚れて、あーあわたしたちもこんなに純粋に生きていけたらいいのに。沢蟹のきみはツヨムくんが獲って来てくれた。ツヨムくんはプロピーという名前の金魚を飼っていて、ツヨムくんはプロピーと命名して数ヶ月後、「こいつなんでプロピーなんけ？」と言い出したので私全然知らなくて「えー知らねえよ」みたいに返したら「可愛いからか、可愛いからか」と納得して寝た。その時まではまだ良かった。仲も良かったし、ツヨムくんの声もすっきりしていた。その次の日の朝だった。プロピーは水槽に逆さまに浮いていて、水槽の下にはゴミのようなものが沢山沈んでいた。プロピーが死ぬ瞬間、身体の力が抜けて一気に体内のものが放出されたのか、黄土色の濁った水の中、赤いプロピーが目印のようにぶかぶか浮いていた。プロピー、プロピーと私やツヨムくんが焦る以前にプロピーの死は明らかだったから今更救出もなんも無い。何も無いけどなんまいだーはしなくちゃなんまいだーとは言わないがせめて土に埋めてあげるか、川に返してあげるかしたいと思った。土か川か悩んでいたらツヨムくんが真っ黒い目で「川行こ」って言った。私は「うん」「川行ってプロピー流しちゃる」「うん」「それでプロピーを色々な生き物の身体に分散させてまた出会うんよ」「うん」プロピーの世話はほとんど私がしていた。ツヨムくんは仕事が忙しかったし、まあ私も仕事は忙しかったけどほとんど家で完結するような業種だもんで「任してくれていいよ」と私から言ったし、こいつ全然世話せんかったくせにこういう時だけ決めてくれるのありがてえな私だったらもう少し悩んでたذارしなと思った。プロピーが死んだのはわたしたちが別れ話をして100回目の、なあなあになったまま迎えた朝だった。

水槽の中の蟹が喋り出す。

蟹：ツヨムくんは僕の命の恩人、そしてお世話をしてくれるミトコちゃんも命の恩人。僕はこんなに薄暗い部屋に連れて来られてしまったが、2人のために、2人が明るくなることなら何でもする

ぞ！ミトコちゃんと朝の挨拶、ツヨムくんがこっちを向いたらピース、そして次の計画は大脱走だ。僕が居なくなったらきっと2人は僕を探す。2人で力を合わせるときって何だってできるよって僕は2人に伝えたい。ねえ、ミトコちゃん。ミトコちゃんはまだ僕を見ている。ミトコちゃんが言う。「それで、君の名前なんにしようかに」「まだ決まっていなかったの」と僕はハサミを持ち上げる「おお、何か思いついたかに」「あ、えっとそういう意味で手をあげたのではなかったけど」「まあいいよ言うてみ」「そっすねえ、髻がかかっているほうがいいですか、それかハサミとか」「可愛い名前にしたいなあ」「けども僕は雄ですからね」「そっか、じゃあカッコいい名前がいいか」「うん」「じゃあレッドシザーマン」「そんなシリアルキラーじゃないんだから」「じゃあ赤白ハサミン太」「みんながきになるみんなが」「じゃあ髻ボーイ」「男の子の髻はみんな髻ボーイじゃないか！ミトコちゃんは僕を見ていないね、本当に僕を見ているなら僕だけにしかない特徴を見つけているはずだしそれを名前にするはずだし」「えっとね、髻ボーイの特徴はね」「一旦採用されてるじゃねえですか」「優しいところ、優しくて気を使ってくれて、いつも誠実で、あの一、明るいところ」「おお、いいね、いいのでできたよいっぱい」「じゃあ全部繋げるね」「え、ちょ、全部」「できた、優優気使誠実あの一明髻（ゆうゆうきづかいせいじつあの一あかるかに）」「なんであの一入れた?!」などと言っていたら、へらへら笑ったアイツが来る、蛇だ「ミトコちゃん、蛇だよ、逃げて、噛まれるよ」「どうして泡出てるの?」「慌ててるの！ほら、後ろ!」「なあに?」「ミトコちゃん、蛇に話しかけられても絶対返事しちゃいけない、蛇は、蛇は君のことを狙ってる……!」

後ろにツヨムが立っていて、ミトコの肩をぽんと叩く。

1-2

ツヨム：（ミトコの肩を叩き）「プロピー、埋めに行こか」僕は目を腫らして言った。「うん」ミトコちゃんはそんな僕に何も突っ込まずにいてくれた。前の日僕はぼこぼこに泣いちゃった。（水槽を覗き込んで）これはまだ君をこの家にお迎えする前の話だけどね、そこにはプロピーっていう金魚がいたんだよ、けどある日死んじゃって、ミトコちゃんと2人で川に流しに行ったんだ。ぶるびーの身体が清められますようになって。川辺に着いて、僕は川の流を覗き込む。かなり速い。石がカタカタ鳴っている。これはまあかなりの速度で清められることになるぞプロピーとは思ったがもうしょうがない、こうやって川辺に降りて来られるところはそんなにいくつも無いし、第一、川の速度がもう少しゆっくりなところを探したとしても同じ一本の川だろう。いつかはこの流れに導かれる。覚悟してくれプロピー「ねえ川じゃまずいって」「え」「金魚死んだらね、川流しちゃまずいんだって」「え、でもそれじゃプロピー清めらんないじゃない」「川が汚れちゃうって」「え」「プロピーが病気だったら川が汚れちゃうって他の生き物にまで病気がうつっちゃうって」「ほんと?」「ほんとだよ、書いてある」「どこに」「なんかペット死んだ時どうしたらいいかまとめみたいなの」「そこにまとめられてんの」「うん」「そうなん」「ツヨムくんやっぱ山いこ山に埋めるのがいいって」「山」

「このまま真っすぐよ」「そうやね」「真っすぐ行ってみよ」「あ、ちょっと待って」川の流れるは速い。流れに揺られて石がカタカタ鳴っている。そのカタカタが先ほどからケタケタという笑い声に聴こえる。

〈お前はプロピーをどこに捨てとんじゃ何も知らんなツヨムくん、ツヨムくんが阿呆やから川が汚れるんじゃ〉

ツヨム：ミトコちゃんが言う。「真っすぐ行ってみよ」「あ、ちょっと待って」僕は石を持ち上げて、ぼんと放り投げた。するとそこに君がいた。「ほうら」「どしたん」「蟹だよ蟹、沢蟹かなあ」「何で石投げたん」「いいじゃない下手投げだし」「そうじゃなくて蟹、気付いてたん」「いやなんか笑われてる感じがして」「蟹に？」「や、君はそんなことせんよなあ」「そっか」「うん」「山いける？」「連れてっていい？」「いいけど、小さいね」「そうだね、へへ、飼おうかな」それで、僕の心の空洞には蛇がいる。アオダイショウみたいな毒はないけど執念深そうな蛇がどうやら居着いてしまったらしい。小学生の時に踏んじまったアイツかな。その前になんで心に空洞があるんだって話だけど、「だからそれは俺が教えてやるよツヨムくん、なあ、ツヨムくん」

2-1

ツヨムくんの心の中の蛇が喋り出す。

蛇：ツヨムくんの心の空洞は、おそらくツヨムくん自身が作ったもので、俺からすれば別に隙間があればどこだって良かったわけで、ツヨムくんはその心の空洞を開けっぴろげにしている、だから俺はああ埋めてほしいんだと、こりゃあお互いにとっていいことだと。そうやってそこに住むようになっただけで、今更出て行けって言われたってそんな都合のいい話はなしでしょって話なわけですよ、でも俺は静かに、餌も求めず、舌をペロペロ時々たまさせるだけ、ツヨムくんの心を読み解くセンサーペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロ、別に放置してくれりゃあいいっしょ、「よちゃ！」「あ」「よちゃ！ツヨムくんの心に住む蛇」「おう、水槽で飼われてる蟹」「飼われてるんじゃない、僕たちは一緒に住んでるんだ」「お前はプロピーの代わりだよ、埋め合わせ」「ちがうね、2人はプロピーとお別れして、その日に僕はここに来たんだ」「それを埋め合わせって言うんだよ」「ちがうね」「じゃあなに」「進化...？」「はあ？」「僕はプロピーから進化したのさ」「金魚が蟹に？」「その証拠に、僕はツヨムくんに見つけてもらうまでの記憶が一切ない！」「馬鹿なだけだろ」「ちがうね、確かにあの時の川の流れるの激しさを冷たさを覚えてる。でも僕はツヨムくんが僕の頭上のカタカタ揺れてる石を持ち上げて、そこに光が差し込んで、その瞬間に生まれたんだ。川の記憶はつまり生まれる前の記憶さ」「わけわかんないこと言ってんじゃないよ、2人は？」「過去を回想中。僕と出会った過去の日、プロピーを山に埋めに行く途中」「け、またそれか」

水槽（回想）の中を覗き込む、蟹と蛇。

そこには山道に行くミトコちゃんとツヨムくと蟹がいる。

ミトコ：いくらか歩いたけれどツヨムくんは、まだ歩みを止める気配はなかった。手の上の蟹が歩くがままに自分の身体を這わせて、どこまでもくるくる目で追って、きらきらした山道をツヨムくんは、無心で歩いていた。私はそれが嬉しかった。2人で何の話をするわけでもないけれど、それどころかツヨムくんは蟹に夢中だけど、私はぜーんぜんそれで良かった、なんか楽しかった。とっても飛び上がりそうなくらい、不思議、プロピーにはごめんだけど。どんだけ山の上に埋めんだよ、まだ行くのかい、行こうぜごーごー、今にも歌い出しそうな私をたまにちらっと見てゆるゆる微笑んでまた歩いていくツヨムくん、ツヨムくんは言う「俺、なんだか忘れられそうだよ」「ん？うん」深く聴かなかった今はそれがいいと思った。「聴いてくれよ」あ、違った「お、お、何を」「プロピーとミトコちゃん以外のこと全部」「えーマジ」そんなに忘れちゃって大丈夫かい、ツヨムくんとは思ったけど、私のことは覚えててくれるらしいし、じゃあいいか、ツヨムくんは最近仕事もなんもかんも上手く行ってなくて、わたしたちも全然上手く行ってなくて、それはツヨムくんが大好きだったホットケーキ残した日に気付いた。この人だいぶキちゃってんなあって。でももう大丈夫なのかもしれない。「うん、大丈夫だよ」「え、お、おう」ツヨムくんの後頭部が笑っている。

2-2

蛇と蟹。

蛇：やばい「え」「え」「何が」「やばいだろ」「なんでどうして」「だってツヨムくん俺のこともお前のことも忘れちゃうよこのままじゃ」「いいんじゃない、ツヨムくんは心の空洞についてだって本当は忘れたいはずだよ、忘れてしまえばそこは自然と埋まってお前は追い出される、それに僕は見ての通りツヨムくんの手の中さ」「でもこれは過去だぞ、過去の回想だぞ？」「だからなに」「もしかしたらお前と違って別れることを選ぶかもしれない」「なに、どゆこと」「過去の回想ではお前を飼いたいけど、この後お前をまた川に還そうとするかもしれないだろ」「はあ？僕はいまここにいるだろ暗い部屋の水槽の中に」「このあと違う奴が帰って来るかもしれないぞ」「そんなわけ、だけれども、そう言われるとここがいつものあの部屋か何だか不安になって来た」「俺はちょっくら向こうに行ってくる」「は、そんなのずるだろ、ないだろそんなのさ」「俺は元々ツヨムくんの心の中にいるんだよ、今だって、ほら」

蛇、過去の回想（水槽）にうねうね潜り込む。

蟹：くそー！気付け、過去の僕！

ふたたび、山道のツヨムくんとミトコちゃんと、蟹。

ツヨム：さっきの話を僕はじんわり噛み締めていた。僕はプロピーが川に清められて、その死が誰かの生に繋がって、また新たな死、新たな生という具合に、終わりから始められる連鎖があると信じていたのだけど、ミトコちゃんが言うには、というかミトコちゃんが見たまとめサイトには真逆が書かれていた。終わりは始まりには転化せず、別の終わりを招くだけだと。プロピーの死が川に清められるのではなく、川を濁らせるのだと、それは僕とミトコちゃんの関係だとも言える。とっくに僕はミトコちゃんにとっては終わった存在で、このままではミトコちゃんも終わってしまう。まもなく山は陰しくなる。引き返せなくなる前にとどまって、プロピーを埋めて、そこで別れを切り出そう。帰り道はばらばらで、僕はこの蟹と帰ろう。なんだかミトコちゃんにも似てる気がする。別にどっちかが死ぬ訳じゃない、だけど一緒にいたらそれも有り得る。僕の負の部分によって彼女を暗がり引き寄せさせるわけにはいかない「なあ、ミトコちゃん」「ほい」「もうそろそろプロピー埋めようか」「そうだね、もうだいふ登って来ちゃったよ、10分前くらいからもうここらへんで良いのではと思ってはいたけど、ツヨムくんなんだか楽しそうだったから止めないでいたよ」「ああ、ありがとう」「ううん」〈ミトコちゃんと別れるな〉僕は思わず「あ」「え？」「え？」「何か言ったツヨムくん」「え、僕はなんにも」〈これまでミトコちゃんはツヨムくんのために沢山尽くしてくれたんだ、それを裏切るのか〉「そういうわけじゃ」「ツヨムくん」「え、どうした」「どうしたの」〈どうもしてないさ〉「どうもしてないよ」

3-1

ミトコが部屋に戻って来る。

蟹：「ただいまー」あれ、ミトコちゃん！「よちゃ！」「よちゃ！それはいいけど、ミトコちゃん、ツヨムくんは？」「あー、ツヨムくんならまだ過去の回想中」「ミトコちゃんだけ戻って来たの」「そうだよ」「どうして？！」「だってツヨムくん、過去のきみ、まだ優優気使誠実あの一明蟹になる前の君ととても仲良さそうにずっと歩いてるもんだからちょっと嫉妬ちゃうか、てか私も疲れちゃったしさあ」「いまツヨムくんを1人にしてはいけないよ！」「大丈夫、夜にはまた合流するから」「それじゃあまずい間に合わないよ」「どしたの、優優気使誠実あの一明蟹」「あーもう時間くうな！略して優優とかにしてよ」「じゃあそうするよ、優優、あのね夜になったらね、ツヨムくんと一緒にクラブに行くんだ、知ってる？DJ っていう立場の人がいて、その立場の人は人より音楽に詳しくて、それ独り占めしちゃダメだよって言われたからか何だか知らないんだけど、みんなに素敵な音楽を教えてくれるの」「それがなんなのさ」「そこでお酒を飲むの」「まずい！お酒はまずい！」「ゆゆ、どしたの？」「蛇が、〈うわばみ〉に進化するよ！」「何？蛇？」「蛇、ツヨムくんの心に棲んでる蛇！」

「(聴いていない) すてきな音楽とお酒、そしたら、分かんない、直感みたいなものなんだけどね、わたし、ツヨムくんはプロポーズされる気がする。」「ちがう、ツヨムくんは君の為に君と別れようとしてるんだ、お互いの幸せのために、僕は2人にお世話になったからずっと仲良くいてほしいけれど、2人が前向きに別れられるならそれがいいと僕も思ったんだ、それに、お酒だとかプロポーズだとか、そんなのは蛇の思うままだよ！いいや蛇じゃない、うわばみだ、蛇より巨大で横暴な、うわばみになりつつあるんだよそいつは」「ちっ(舌打ち)黙ってるよ」「.....ミトコちゃん？」蛇は過去の回想に忍び込み、こっそり住処を変えていた。くそー！気付け、過去の僕！あれ、ミトコちゃん、どこいくの「言ったでしょ、待ち合わせしてるの」

ミトコ、クラブへ向かう。

3-2

山中のツヨムと蟹。

ツヨム：僕は意を決して口火を切る。ミトコちゃん、ちょっと聞いてほしいことがある「ツヨムくん」うん(と振り向くとミトコはいない)あれ、ミトコちゃん？「ツヨムくん」うん、あれ「ツヨムくん」「あれ、ミトコちゃんどこ？」「ミトコちゃんじゃないよ僕だよ」「え、だれ」「今、君の肘らへん」「ミトコちゃん？(と、咄嗟に肘を見る)」「よちゃ！」「あれ、きみ」「よちゃ！」「きみ、ミトコちゃんだったのかあ」「どうしてそうなるかなあ」「あれ、でもそうするとまたミトコちゃんと暮らすことになってしまう」「ツヨムくん、君はなんで心に空洞を作ってしまったんだ、それも蛇が住み着けるような大きな」「自分でも分からない、仕事があまくいかないってのはある。だけどそれは仕事があまくいかないからってよりも、それがあから仕事があまく行かなくなっていった」「だからそのそれってのはなんなのさ」「ずっとわからなかった、空洞の前にもやがかかっている自分でも見ないようにしていた、だけどプロピーが死んでちょっと分かったことがある。」「うん」「未来がずっとうすぼんやりしてたんだ、色がなんにもなくて、でも透明じゃなくて、くすんでいるんだけど例えられる色ではなくて、肌色のようなグレーのような、なんだか温度も気配もない色がずっと時間の壁紙(かべがみ)で、僕は自分が死んだ未来のことや、もっと先の未来のことをどう捉えたらいいのか見失ってたんだ」「.....ほえ～」「わかるかい」「僕は蟹ですから.....」「さっきプロピーを川に流そうとした時おもったんだ。死んだ後も未来はある、忘れられ方っていうのにも種類や意味があるって。僕はこの世界に自分の死を清めてもらおうとばかりしていた、でも本当は逆だ、この世界を汚さないように旅立たないといけない」「.....ほえ～」「わかるかい」「あ、あ、あの、ツヨムくん、君は死んだのかい？」「.....そうみたい」「そうみたいって」「今喋ってて気付いちゃった」「え、え、」「どおりでおかしいと思ってた、ようやくわかったよ、僕もういないんだわ、わはは、うわああああん(泣く)ミトコちゃんに清められようとしてた、引っ付いては離れたりして気を引

こうしてただけだ」「これは蟹の勤ですが、もうぐずぐずしてちゃいけない」「うん」「きっと、プロピエ、ツヨムくんを気付かせるために」「う、う、わはは、うわああああん（泣く）」「およよ、大丈夫、大丈夫だよ、ツヨムくん」「うん」「きみの言う通り、死んでからも未来は続く、もちろん君の未来も、むしろ死んでからが勝負だよ！」「うん」「ツヨムくん」「ミトコちゃんはいまどこにいる？」「今さ」「いま？」「っていうか未来」「未来？」「今日はプロピエを埋めた日だ、ツヨムくんはまだそこにとどまっている、ミトコちゃんは今先に行っちゃった、僕をすでに部屋に連れて帰ってるしすでに何ヶ月も一緒に生活しててさっきやっと名前をつけてもらったところだ」「君にはもう名前があるのか」「うん」「教えてよくれないか」「いや、あの、えっと、長くなりそうだから省略するけど YOU, YOU。ミトコちゃんにつけてもらった。」「あなた、あなた、か」「いや～そういう意味でないんでない」「ううん、きっとそうだ、ゆー、ゆー、なんだ、僕たちはあなたとあなたなんだ」「行こう、クラブナイト」「その前にプロピエ埋めないよ」「そだそだ」

4-1

クラブ。

クラブミュージックが流れている。

ミトコ：こんなところに来るのも何ヶ月ぶりか数年ぶりかのはずなのに、だけど初めてのようにも昨日も来たようにも思えるのは、懐かしい音楽がしゅわしゅわと鳴っているからで、私はすかっとしたやつが飲みたいと思った。その懐かしい音楽もよく聴けば初めて聴く曲のような気もしてきた。そんなもんだ人間。影と光が音と連動して入れ替わり、些細なノイズが自然音まるで風が吹いて草木が鳴るかの様にランダムに訪れて、空間の雰囲気は一秒ごとに爆発している。そして同時に、まったくとした一定の虚無が流れていて、私は悔しくも居心地がいい。忘れっぽいわたしが覚えていたのはここでこうやってツヨムくんと二人でお酒を飲んだこと。この記憶は、私の過去か未来かそのどちらかに落っことしたものだ。どっちだったろう、ツヨムくんは覚えているかな、そんなツヨムくんとのぜんぶの季節がこの狭い四角い空間の中にある。マスター一杯ちょうだい。「へい何にしましょう」「辛ロジンジャーエールで！」「え、あっはっは、ここはクラブですよ、せっかくですから、ねえ」「や、お酒はツヨムくんが来るまで取っておきたいので」「ああ、そういうこと、ちっ……さっさと飲めよ」「え」「そのお連れ様はいつ頃来られます？」「いやあどうなんでしょう」「あ？」「見当もつきません」「はい？」「何せ過去から来るもんで」「は？は？」「早くて、半年後？」「おいあんたおちょくってんの」「だって本当なんだもんいいでしょ音楽は永遠だーってよく言うじゃないですか、たかだか半年も待てないなんて音楽ってそんなもんなんじゃないか」「あのね、こういうの営業妨害って言うんだよ酒も飲まずに半年も居座るなんて許されるわけ……」

そこに蟹が到着する。

蟹：よちゃ！「あ、蟹」「お前今度はマスターの心に住み着いたな？」「しょうがねえだろ俺だってこんなにバタバタ住み替えたくねえよ、だけどこここに着いた途端ミトコちゃんの心の空洞が埋まっちゃったんだ、俺は押しつぶされないように思わず飛び出してとりあえず目の前のマスターに移ったってわけ」「何を企んでる」「ミトコちゃんに酒を飲まそうと仕向けてるところだ。そうすれば俺はうわばみへと進化する。俺はもっともっと大きくなってこのクラブに住み着いて、ここに来た人間すべてをコントロール。いずれはこの世界ごと飲み込むくらいに.....」「わるめ〜！」「ミトコちゃんはツヨムくんが来るまでお酒を飲まないと言っている、お前からも説得してくれないか」「なんで僕が」「頼むよ」「あれ？でもお前はもうミトコちゃんの体から離れたんだろ？マスターなんだから自分で飲めばいいんじゃないの？」「あ、確かに、あ」「.....あー！しまった！」

マスター（蛇）、にやりと笑って酒を注いで一気飲み。

蛇は巨大化していく。

蟹：あー！ミトコちゃん逃げて！「あれ、ゆゆ、どしてここに」「いいから早く」「ていうか最初から連れてくれば良かったよお家で待たせてごめんよ」「ミトコちゃん聴いてくれ〜（泣く）もうここに居ちゃダメだあ〜」「でもツヨムくん待たなきゃだよ約束してるんだもん」「あとどれくらい？」「早くて半年後？」「もっと急いでもらうことはできない？」「えっと私たちが戻れば半分の3ヶ月前のところで会えるかも」「いやだめだ、ただでさえ意味分かんないのにもっと分からなくなる」「それか3ヶ月前の私たちに一ヶ月前半前に戻ってって言うか」「どうやって？」「3ヶ月戻って」「じゃあ4ヶ月半かかるじゃん」「じゃあ半年かかる」「じゃあダメじゃんか〜！（泣）」〈ミトコちゃん、もっと早く気付かなきゃ、ツヨムくんとっくにもうおかしかつたはずだよ〉「そうなんだ」〈きみが悪いんだ〉「ミトコちゃん騙されちゃいけない！」〈きみのせいで〉「私のせいか、そうか」「ミトコちゃん！」〈とっくにツヨムくんは壊れていたのに、君が放置したせいで半年前から帰って来れない〉「でもツヨムくん今日のことは覚えてると思う。二人でお酒飲むなんて久しぶりだから、楽しみにしてると思う」〈だとしてももう遅い、今もどってきたところで〉「それに私、どんなツヨムくんも好きだしな、ツヨムくんが辛そうなきも、ひとりぼっちで静かにしてるときも、私そのツヨムくんが好きだしな、何にも言うことはねえっすよ、一緒に入れたらそれだけで」〈ツ、ツ、ツヨム君はもう死んでるんだぞ！〉「そうなの？！」「知ってるよ」「知ってたの？！」「うん、でも死んでもツヨムくんはツヨムくんだしな、別にばいばいのタイミングくらい、ツヨムくん決めてもらえばいいじゃない」「...ミトコちゃん」〈うわ、うわ、うわあああ！〉

蛇、マスターの体から飛び出る。

居場所をなくした蛇は叫びながら消滅する。

蟹：マスターの心の空洞が埋まった！ミトコちゃんの言葉によって！

マスター：はい、辛口ジンジャーエール

ミトコ：ありがとうございます

ミトコ、ジンジャーエールを飲む。

蟹：蛇はふるふると震えて、もしくはしゅわしゅわと薄まって、どこかに逃げて行きました。そしてその言葉通り、ミトコちゃんはクラブで半年間ツヨムくんを待ちました。僕も一緒に待ちました。

4-2

半年後のクラブ。

クラブミュージックが流れている。

ツヨムくんが現われる。

ツヨム：ミトコちゃん | ミトコちゃん：よちゃ！

ツヨム：あれ、蟹？ | ミトコちゃん：なんちゃって、私だよ

ツヨム：あ、あはは、ごめんね、待たせて

ミトコ：418本ジンジャーエール頼んで225回トイレ行ったど、数えてた

ツヨム：ごめん、頼もうか | ミトコ：やっとお酒が飲めるよ～

ツヨム：マスター、ハイボールを（ミトコに目配せして）2つ

ミトコ：思ってたより15分くらい遅かった

ツヨム：ああ、一回家に寄ってね、蟹を水槽に入れて来たよ、大丈夫、ごはんも入れておいたよ

ミトコ：そっか

蟹：僕も一緒に待ちましたけれど、ここでやっちゃったことに気付きました。過去の回想の過去のツヨムくんから連れて来られた過去の僕が、今のミトコちゃん家の部屋の今の水槽に入れられてしまいました。つまり今の僕は宙ぶらりん。帰る場所を失っちゃったのです。わはは、これじゃあ蛇と一緒にだよ～（泣く）。でもこのクラブとかいう薄暗いところでミトコちゃんとツヨムくんを待った半年間はとても楽しかったのです。週末になると代わる代わるの人が来て、みんなに「よちゃ！」と挨拶をした。ミトコちゃんともいっぱいお喋りをしたのです。やっぱりミトコちゃんもツヨムくんも変だなあと思ったのは二人の名前.....

ツヨム、ハイボールを2つ持って、1つをミトコに渡す。

ミトコ：ありがとう～

二人、静かにハイボールを飲む。

音楽が響いている。

ツヨム：そうだ、返さないと

| ミトコ：え、ああ本当だ

ツヨム：忘れてた？

| ミトコ：ううん、馴染んでた

ツヨム：そっか、はいこれ、ヨ

| ミトコ：はい、ト、交換

蟹：二人は付き合い始めたときに名前の一文字だけを交換したんだって、あんまし意味分かんないけどそうしたんだって、それは二人だけに分かればいいんだって。だから僕は沢山笑った。なんじゃそりゃ～って。そしたらミトコちゃんも、いやミヨコちゃんも沢山笑ってた。

ツトム：ミヨコちゃん

| ミヨコ：ツトムくん

ツトム：よし、これで別々だ

| ミヨコ：そうだね、そうだな

二人、静かにハイボールを飲む。

ツトム：これを飲み終えて

| ミヨコ：うん

ツトム：プラスチックのコップに氷がカラカラ言うでしょ、そしたらおしまいだ。僕は真っ暗でも真っ白でもない世界に行くんだ。そこに君はいないけど、きっとすべてがあるんだ。美味しいご飯を食べてね。そうしたら僕には聴こえるよ、君がもぐもぐしてる音、多分ね。

ミヨコ：あは、そうなん？

ツトム：夜一緒に寝てる時、寝室の隣の部屋の水槽から蟹が歩く音がよく聴こえてたでしょ、よちよちよち歩く音が、ささやかな小さい音だけど、不思議なもんで僕たちにはしっかり届いてたんだ。それと一緒に。

ミヨコ：あは、どこがだよ～（笑）

ツトム：生きてると音がして、それはどんなに小さくても、だれかに届くんだ

ミヨコ：そうだね、もうそういうことにしよう！

ツトム：だから僕は、プロピーに、このごくごくを届ける。

ツトム、ハイボールの残りを一気に飲んでしまう。

ツトム：聴こえた？

ミヨコ：無くなっちゃった。

ツトム：ああ、そうだね。

二人は言葉もなかにやにやしている。

蟹：そうやって二人は気付いたらお別れをしていたんだそうです。どちらかがクラブを出てどちらかがクラブに残って、それ以来二人はもう会うことは無かったんだそうです。それで僕はというと、自分がいるからミヨコちゃんの部屋には帰れないし、ツトムくんの後を追うわけにもいきません。大脱走計画成功、なのかな？二人が仲良しなのも分かったしまあこれで良かったのかも。あとは貰った名前だけを大事に生きて行きますよ僕は。YOU, YOU。あなた、あなた。……ああそういうことね、なるほどねん。なるほどなるほど。変なの～。

蟹は笑っている。踊っているようにも見える。

おわり。

〈参考文献〉

盛岡の民話『蟹沢山』

怪と幽 Vol.007『またまたあもくん』諸星大二郎